

令和3年度「学校評価実施報告書(前期分中間報告)」

1. 「確かな学力」の育成に向けて

(1) 重点目標

生徒が「伝える力」の伸長を意識する教育活動を実践を通じて、持てる力を引き出す。

(2) 具体的な取組

- ・新学習指導要領の意図を把握し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を進める。
- ・「伝える力」を身に付けるための具体的方策を明示し、生徒個々の伝えるツール（GIGA 端末など）のスキルアップを図り、自信を付けさせ、意見交流などを活性化する。
- ・教科会を定期的に行い、公開授業月間（11月）を設定し、互いに授業を見て学びとれたことを交流する研修会を行う。研修会の形態も見直していく。
- ・各教科ともに、「学ぶ意義」「将来性」「身につけたい資質・能力」「魅力」などに着目したプレゼン資料を作成し、簡潔・丁寧に伝える全校集会（梅津の学び オリエンテーション）を実施する。
- ・「本時の目標」と「本時のふりかえり」を毎授業確認、記述する。特に振り返りを重視する。
- ・学習確認プログラムテストの結果を基に、授業担当者が成果と課題を詳しく分析し、以降の指導に生かす。
- ・学習内容の定着に課題のある生徒に対する個別の支援体制を「伝える力」の伸ばす視点で学年ごとに協議し、実践する。
- ・日々の家庭での学習時間確保と一週間の学びの定着を目的とし、生徒一人ひとりに自学自習ノートを持たせて、定期的に朝学活で集めて、終学活で返却する取組をする。教科担任とも連携する。

(3) 中間総括（成果と課題）

3年生の学習確認プログラムでは、5教科ともPre 3の結果を上回り、総合でも全市平均を上回った。全国学力・学習状況調査でも、平均正答率が国語で+0.6 ポイント、数学では+1.8 ポイントとなり、ここ数年来最高の成績である。

全国調査の生徒質問紙の質問(14)「自分の思っていることや感じていることをきちんと言葉に表すことができますか」において『あてはまる』の回答は、全国値を10.7 ポイント上回り、質問(15)「自分と違う意見について考えるのが楽しいと思いますか」においても、『あてはまる』の回答が全国値を9.4 ポイントも上回った。家庭学習の状況では、生徒質問紙の質問(17)「家で自分で計画を立てて勉強していますか」において、『よくしている』は、全国比-4.9 ポイントであるが、『ときどきしている』は、+9.1 ポイントであり、質問(18)「平日、学校以外での勉強時間」でも、『2時間以上』は、全国比+6.0 ポイントであるが、『1時間以下』も全国比+9.0 ポイントと二極化が進んでいる。

読書の状況では、生徒質問紙の質問(21)「学校の授業以外に、普段平日一日あたり、どれくらいの時間読書しますか」に対して、＊『2時間以上』から『10分より少ない』まで、それぞれで全国平均を上回り、＊の合計で全国比+7.7 ポイントとなっている。

学校評価の生徒アンケートの設問①「学校の授業は活発でわかりやすい」には、『そう思う』と『大体そう思う』の合計が95.5%と回答し、『そう思わない』生徒は0.3%。保護者アンケートの設問②「子どもは学習内容がわかり、前向きに取り組んでいる」には『そう思う』と『大体そう思う』の合計が76.6%で、『そう思わない』保護者は2.2%であった。昨年同期比で、生徒の回答は+1.4 ポイント、保護者評価-8.4 ポイントとなっている。コロナ禍による休校措置や感染予防の見地から、全校での「学びのオリエンテーション」は行えず、学力の低下や学習意欲の減少が心配されたが、3年生の1st の学習確認プログラムテストの結果や学びのアンケートなど

をみると、大きく変化はしておらず、逆に危機感を感じる中で、学習についての意義や重要性を感じ、家庭での自学自習の習慣が身についた生徒もいたと考えられる。学校評価アンケートでの、生徒質問「学校の授業はわかりやすい」や保護者質問「こどもは学習内容がわかり、学習に前向きに取り組んでいる」では、それぞれ「そう思う」と「大体そう思う」の回答を合わせた比率が、それぞれ前年比、生徒が+3.3%，保護者が+5.5%となっていることからもわかる。また、昨年度から取り組んでいる生徒につけたい資質・能力として、自らの考えを「伝える力」についても、その定着率がわかるように行なった「学びのアンケート」において、教職員が想定しているよりも生徒たちは、「伝える力」を意識して行動していて、生徒たちの方が「伝える力」に対して柔軟な考え方を持ってくれていることがわかった。

コロナ禍の中で、「主体的・対話的で深い学び」を重視した授業形態は取り入れにくく状態は続いているが、感染対策を講じ工夫して進めて行きたい。

(4) 分析を踏まえた取組の改善

3年生における学習確認プログラムの安定した結果や、全国調査での全国を上回る結果については、最近3年以上にわたり、カリキュラムマネジメントの中で、本校生徒につけたい資質・能力である『伝える力』の育成を意識して、教育活動のあらゆる場面で展開してきた成果が現れてきたと考える。生徒質問紙の(14)(15)の結果からもわかるように、生徒たちは自分の考えや意見を表現したり、交流したりすることに抵抗が少なくなっている。このことから、授業などでわからないところや疑問に思うことを遠慮なく表すことができ、それに周囲が答えてくれる関係ができあがっていると考えられ、学力向上につながっていると考える。

家庭学習では、二極化が顕著に表れてきている。学習習慣が定着してきている生徒は、時間を伸ばしているが、全くしない生徒も変わらない状況である。自主学習(JJ)ノートなどでの後者へのアプローチに見直しが必要と考える。

昨年度からの司書教諭の配置による図書館教育や読書教育の成果が、質問(21)の結果に表れてきている。タブレットなどの活用の広がりで、図書館の活用などが減るかと懸念されたが、うまく連携してできていると感じる。

「学びのアンケート」の解析をより進め、「伝える力」の内容・意義を生徒・教職員で共有することにより、成果として実感していく取組を進めたい。小中一貫教育の中で、同じく「伝える力」に取り組んでいる両小学校ともしっかりと連携・分析し、成果を共有していきたい。

家庭学習の意識の高まりを、JJノートなどの活用方法を交流するなどして、継続させていきたい。

(5) 学校運営協議会による意見・支援策

様々な制限が入る中、いろいろと工夫をし、学力を向上させていることは評価したい。GIGA端末などを利用し、さらに研究してほしい。今の社会では世界の共通言語となりつつあつ「英語」を話せる能力を身に付けることは、欠かせないことと感じる。さらにはすすめてほしい。

2. 「豊かな心」の育成に向けて

(1) 重点目標

自分と周りの仲間の人権を大切にし、尊重し、多様な個性を認め、支え高め合える集団の形成

(2) 具体的な取組

- あらゆる場面で「人権」意識し、仲間を「尊重」する言動ができるようにする。
- 「伝える力」から「伝え合い折り合いをつける力」への発展を目指し、自律した生徒の集団を育成する。学級の班、学級、学年、学校へと小集団から大集団へとつなげる。
- 「トークイン梅津」(感動体験作文発表会:年間3回)を総合的な学習の時間に行い、自分の意見や考えをまとめ、文章にして仲間に伝える。さらに、生徒同士で意見を交流することにより、生徒の心を深く耕し、学校全体に一

体感を持たせ、誇りある集団を育成する。

- 3年間を見通した「人権教育」の計画を進めるとともに、学年やクラスの実態、そして「コロナ禍」など、今日的課題に適した内容を適宜取り入れ、望ましい「仲間づくり」につなげる。
- 道徳教育を充実させ、共によりよく生きるために、お互いの生き方や価値観の違いを認め合い、その良さを伸ばし合い、多様性を理解する姿勢を身につけさせる。
- いじめや暴力などの問題行動に対しては、毅然とした姿勢で指導を徹底する。特にいじめは重大な人権侵害であることを認識し、未然防止・早期発見のための学校体制を継続する。また、新型感染症などに対する偏見などに配慮していく。
- 「伝える力」の基礎となる言語能力を高めるため、「朝読書」を小中一貫で行う。また、新聞記事も採り入れ、考える力の基礎も養う。「伝える力」の基礎となる言語能力を高めるため、「朝読書」を小中一貫の取組としても継続していく。

(3) 中間総括（成果と課題）

所謂、第4波・第5波と言われるコロナ禍が収束を見ない中、何とか休校をしないで前期を終えようとしている。特に第5波では、中学生での濃厚接触者となったりする生徒も多数出た中、幸いなことに、コロナ関連でのいじめ事案のようなものは、全く発生しなかった。現在、進んでいるワクチン接種の状況でも同様である。日頃から進めてきている人権教育の成果と考える。

来校される委員会や地域の方たちからは、あいさつも出来て、とても雰囲気のいい学校との評価をいただいている。しかし、コロナ禍の中、地域での遊び方などで、迷惑をかけることも発生している。

学校評価生徒アンケートの設問①「学校生活は楽しく充実している」で『そう思う』『大体そう思う』の回答は94.2%で、前年同期比▲1.8%。③「学校のルールや約束を守っている」で『そう思う』『大体そう思う』の合計は95.2%で、前年同期比▲2.4%である。

学校評価保護者アンケートの設問②「子どもは楽しく学校に行っている」は92.9%が『そう思う』『大体そう思う』と回答し、前年同期比▲4.4%④「子どもは学校のルールや約束を守っている」では、97.9%が『そう思う』『大体そう思う』と回答し、前年同期比▲0.3%である。

学校に楽しく登校できたり、ルールやまりを守ろうとする意識は、ここ数年、1年生よりも3年生の方が高く、いじめやけんか等も、3年生よりも1年生の方が多く発生している現状である。1年生のけんかやいじめの実態としては、ふざけや冗談のつもりがきっかけでトラブルになる傾向、また、スマートフォンなどのSNS関係の中でのトラブルが多いところである。先輩を手本として、相手の心がわかる人になれるように継続して指導していきたい。

昨年度より、コロナ禍の状況による影響が、アンケートなどの結果に大きく出ていると考える。アンケートを実施した時期について考えると、昨年度は年度当初、休校などの期間があったが、一旦、感染状況に落ち着きがみられ、教育活動が平常時に近い状態になっており、その後も収束に向かうという、希望的観測もあった。しかし、今年度は8月～9月にかけて過去最大級の感染状況となり、さまざまな教育活動に制限が加わり、さらに今後再び広がりが起こる不安感から、学校生活に対する不安感が増大したと考える。

保護者アンケートの「先生たちは一生懸命教育に取り組んでいる」という質問に対して、98.7%が『そう思う』『大体そう思う』と回答していることから、取組の方向性は理解しながら、内容自体には、満足できないということになっていると考える。生徒の回答も、同様の傾向が見られる。

1年生が文化祭の合唱コンクールや舞台発表を経験できてないことが、学校への帰属意識や学校愛を得る上で、大きなハンディキャップになることは間違いない。生徒会活動やトークイン梅津などの取組を通して、意識を変えて行ければと考える。

(4) 分析を踏まえた取組の改善

アンケートの取り方をタブレットやスマホからできるようにしたり、記名を求めなくなったりと、条件は昨年度と若干違うところはあるが、評価が高止まりして、下がっていることは、真摯に受け止め、各部会や委員会での原因を分析し、研修会などで共有し、改善を図る。

特に、コロナ禍の中で、少しずつたまっているストレスなどが、大きな問題行動などに繋がらないように、生徒や保護者と対話を丁寧に続けて行くこととする。

(5) 学校運営協議会による意見・支援策

コロナ禍の中、マスコミやネットの情報の中で、何が正しい物なのかをしっかりと見極める教育・指導を展開していくってほしい。コロナ関係での偏見やいじめが起こっていないことには安心した。

学校に来にくい生徒に対して、丁寧な対応をしてほしい。

学校から離れた場所では、道に広がって危険な歩き方をしている生徒も多い。

挨拶を含めて、数年前の所謂荒れた状態からは、脱していると感じる。

3. 「健やかな体」の育成に向けて

(1) 重点目標

食・健康・安全などについての関心を高め、心身の健康保持推進に対する実践力を培う。部活動や体育実技などの運動やスポーツを通じて、体力の向上・情緒の安定、そして知的な発達を促す。

(2) 具体的な取組

○感染症への正しい知識を伝え、対策を万全にし、子どもの健康と学びを守る意識を高める。

○保健教育の充実を図り、基本的生活習慣確立に向けた指導と支援を行う。

○年度当初の各種の健康診断結果を重視し、本人・保護者と共有し、積極的な専門医受診を促す。

○生徒一人ひとりのアレルギーなどの体質を、全教職員で共通理解し、適切な対応・支援を行う。

○朝の健康チェックにより、日常の健康観察の徹底と感染症などの拡大を防止する。

○「食育だより」などを活用して食育を推進し、心身の調和のとれた成長を図る。特に、朝食の必要性を本人・家庭に周知し、喫食率の向上を目指す。

○薬物乱用防止教室、非行防止教室、防煙教室などを開催し、飲酒・喫煙・薬物に関する指導を徹底する。

○定期的な避難訓練や登下校の安全指導を通し、生徒の安全意識と危機管理能力の向上を図る。

○部活動ガイドラインを遵守し、適切な運用を進める。

(3) 中間評価（成果と課題）

全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の集計によると、本校生徒の基本的生活習慣については、少しずつ改善が見られる。例えば朝食を『毎日食べない』『あまり食べない』生徒の合計は9.6%であり、2年前の調査から半減しており、全国7.1%・京都府8.4%にかなり近づいてきている。就寝と起床時間の不規則さや遅さなどもほぼ全国や京都府の値に近づいている。

新体力テストの結果は、今年も全市・全国平均を下回っている。しかしながら、体育の授業や部活動など意欲的に取り組む生徒が多く、「運動嫌い」が多い印象は、顧問や体育科教員によるとあまりない。コロナ禍の中、度々部活動が休止しているが、参加率は高い。

年度当初の各種健康診断結果後の受診率は、上昇傾向にある。また身体測定の数値上は、全体として大きな課題はみられない。第5波の中でも、体調を崩す生徒は少なく、感染を恐れての欠席者も極わずかであった。保健室の来室状況もかえって減少している。

生徒アンケート①「部活は活発で積極的に取り組んでいる」で、90.4%が、『そう思う』『大体そう思う』と回答。前年度同期比▲4.2%。保護者アンケート②「部活動の時間や内容は適切である」で90.4%が、『そう思う』『大体そう思う』と回答。前年度同期比▲9.4%となっている。

朝食を探すことや基本的な生活習慣の改善が見られつつあるのは、地道な保健委員会や健康教育の取組の成果と考えられると共に、コロナ禍による健康面への不安からの要因が考えられるところである。この状態を維持し、さらに改善するための手立ては必要である。

新体力テストの結果は、まだ全国平均には届かないが、運動系の部活動では、このガイドラインで制限がかかる中、陸上部を中心に、近畿大会や全国大会へ出場する選手も数名いた。個人種目では自主練習などを工夫して、克服できるが、チームスポーツでの活性化は厳しいものがある。

第5波の影響で、部活動が休止になり、新人戦などが中止になる中、部活動へのアンケートの値が下がるのは、想定されるところである。

保健室の来室者が減少しているのは、体調が優れないときは、欠席するように勧めてきた影響と考える。毎朝夕の体温チェックなどは、健康維持に役立っていると考える。

(4) 分析を踏まえた取組の改善

コロナ禍の影響によって生じている状況かどうかをしっかりと見極め、健康維持に好材料となっている点については、収束して平常時に継続していくこととする。

食教育の視点とも連動し、朝食の大切さを伝え続ける。

部活動ガイドラインの再確認を行い、生徒・保護者に理解を求め、地域スポーツへの移行も視野に入れて活動をすすめる。ガイドラインの中での時間を有効に活かす部活動の運営を考えていく。

(5) 学校運営協議会による意見・支援策

新型コロナウィルスの状況やワクチンなどの情報を正しくしっかりと伝えてほしい。インフルエンザへの警戒を強めてほしい。今後の運動時のマスクの着用について、適切に指導してほしい。